

令和 5 年 5 月 31 日現在

機関番号：37111

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13664

研究課題名（和文）近代社会形成原理における世俗と宗教の相克：J. ロックの宗教的言説の社会的意義

研究課題名（英文）On the Interplay Between Secularization and Religion: Focus on John Locke's Religious Thought and its Social Meaning

研究代表者

武井 敬亮 (TAKEI, Keisuke)

福岡大学・経済学部・准教授

研究者番号：90751090

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果として、第一に、ジョン・ロックの『キリスト教の合理性』（1695年）に対する国教会聖職者ジョン・エドワーズの批判、及び、それに対するロックの反論を、当時の歴史的文脈を念頭におきながら分析することにより、ロックの合理的な聖書解釈の特徴やその社会的意味合い（理神論者に対する批判、及び、宗教的熱狂に対する警戒）を明らかにした点が挙げられる。第二に、ロックの『パウロ書簡注解』（1705-1707年）を分析することにより、そうしたロックの聖書解釈が、『人間知性論』で展開される自らの知識論（自立的な知性の働き）にもとづいていたことを示した点が挙げられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義として、特に以下の二点が挙げられる。一点目は、当時の歴史的文脈の中でロックの宗教的著作を分析することにより、ロックの聖書解釈の特徴をより明確に把握することができたことである。晩年のロックについては、しばしば、理性から啓示に立脚点をシフトしたと言われるが、ロックが聖書解釈をするにあたり、『人間知性論』や『知性の正しい導き方』で展開される知識論を援用していたことを具体的に示すことができた。二点目は、そうした聖書解釈を提示したロックの意図やその社会的意味合いを、教義論争が過熱することによる宗教的熱狂や社会不安に対するロックの批判的態度の表れとして解釈できることを示した点である。

研究成果の概要（英文）：The first achievement of this study is that it clarified the characteristics of Locke's rational interpretation of the Bible and its social implications (his criticism of the deists and caution against religious enthusiasm) by analyzing the Anglican calvinist John Edwards's criticism of Locke's The Reasonableness of Christianity (1695) and Locke's refutation of that criticism with the historical context in mind. Second, by analyzing Locke's A Paraphrase and Notes on the Epistles of St. Paul to the Galatians, 1 and 2 Corinthians, Romans, Ephesians (1705-1707), I have shown that Locke drew on his own theory of knowledge (the function of human understanding) in his An Essay Concerning Human Understanding when interpreting the Bible.

研究分野：社会思想史

キーワード：ジョン・ロック ジョン・エドワーズ 『キリスト教の合理性』 『パウロ書簡注解』 理性 啓示
無神論 聖書

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) 学術的背景: 「近代社会」理解の見直し

宗教思想の“近代化”とは、本来、啓蒙思想と結び付けられてきた 世俗化 = 脱宗教化 を意味するものではない。従来の素朴な啓蒙思想のイメージは、旧来の制度や伝統的な価値観に拘束された人々の蒙昧さに理性の光を当てることによって、彼らを進歩へと導くものであり、それが近代化への道を切り開いたというものであった。

しかし、近年、こうした単純な「近代社会」理解に対して、大幅な見直しが行われている。例えば、J. G. A. Pocock の一連の研究を契機に、共和主義思想や人文主義の伝統が啓蒙思想に与えた影響に注目が集まっている。また啓蒙の担い手にも関心が向けられ、Margaret C. Jacob や J. Israel は、17 世紀イングランドの急進主義者の著作が、宗教性を内包しつつ、当時の伝統的な思考様式の世俗化に果たした役割を「急進的啓蒙 Radical Enlightenment」として描く。両者に対する批判もあるが、最近でも論文集 (Lavaert and Schröder (eds.) (2017), Ducheyne (eds.) (2017)) が出版されており、依然として、有力な啓蒙思想の系譜と考えられている。K. Haakonssen は、非国教徒を「賢明な非国教徒 Enlightened Dissent」と呼び、彼らが啓蒙思想に果たした役割の重要性を強調する。他方、こうした非国教徒や急進主義者に注目する研究に対して、国教会側の思想(アングリカニズム)が啓蒙に果たした役割を積極的に評価する研究もある。例えば、W. J. Bulman は、社会的安定と道徳的改善を目指すイングランド国教会の運動を、「アングリカン啓蒙 Anglican Enlightenment」として描く。

こうした近年の啓蒙思想研究から、17 世紀から 18 世紀にかけて、また、イングランドからスコットランド、あるいは大陸ヨーロッパにかけての思想の展開プロセスにおいて、複数の経路が考えられること(複数の啓蒙 Enlightenment の可能性) さらに(まだ十分に研究が行われているわけではないが)宗教思想もまた、それが保守的であれ急進的であれ、変容を遂げながら、近代社会の形成に影響を与えていたことが分かってきた。

(2) 学術的「問い」: 思想的变化・社会的变化を引き起こすものとは?

こうした思想潮流の中で、本研究で中心的に取り上げる 17 世紀イングランドの思想家ジョン・ロックは、どのように位置付けられるのであろうか。既存のロック研究においては、R. Ashcraft の研究を中心に非国教徒や急進主義者と結び付けられる傾向にあったが、自身のこれまでの研究から、ロックの秩序志向が強いこと(保守的性格)や、ロック自身が国教会信徒であり続けたことから、アングリカニズムの影響を受けていたことが推察される。他方、J. Marshall が *John Locke, Toleration and Early Enlightenment Culture* (Cambridge, 2006) の中で詳細に論じたように、大陸の知識人との交流がロックに与えた影響も見逃すことはできない。自身のこれまでの研究においては、国教会聖職者との論争を中心にイングランド内部におけるロックの思想形成やその特徴の解明に努めてきたが、本研究では、より大きな知的ネットワークの中で、ロックの思想的展開について考えたい。ただし、問題は、具体的にどのようなかたちでロックが知的影響を受けたのか、ということである。そこで注目するのが、ロックの宗教思想の基礎となる聖書解釈(の方法)である。以下で詳述するように、ロックは、国内外を問わず聖書に関する注釈書を多数所有しており、メモや草稿を書き残している。また、聖書解釈の方法についても、同時代人と書簡のやり取りを活発に行っている。このことが意味しているのは、当時、聖書解釈の方法それ自体が、重要なトピックになっており、J. A. I. Champion の表現を借りれば、「聖書批評 biblical criticism の国際的なネットワーク」が形成されており、ロックもそこに参加していたということになる。これは、従来のロック研究においてはあまり重視されてこなかった新たなコンテクストであり、その中でロックの宗教思想や宗教的言説、及びその社会的意義について再検討することが、ロック研究における新たな課題であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、聖書解釈の方法の変化 による 思想的・言説的变化 とその社会的影響を、ロックに即して明らかにすることにある。ロック自身、聖書解釈の方法について、イングランド国内の著名な聖書注解者 (John Lightfoot, Joseph Mede, John Spencer, John Selden 等) の著作を読み、抜き書きのメモを作成している (MS Locke f. 30)。また、フランス滞在中に出会った聖職者のリシャール・シモンによる「歴史批判的手法」を駆使した『旧約聖書の批判的歴史 *Histoire Critique du Vieux Testament*』(1678 年; 英訳は 1682 年に出版) からの影響や、聖書学者のニコラ・トワナルからの影響も指摘されている (Parker (2004))。これらのうち、イングランドのヘブライ学者・聖書学者のジョゼフ・ミードに関して、ロックは多くの抜き書きを残している。また、シモンの同著作についても抜粋メモを残しており (MS Locke f. 32)、彼の聖書批評については、同時代人 (ニュートンやル・クレール) との書簡のやり取りの中で、ロックが強い関心をもっていたことが明らかになっている。

そこで、本研究では、ロックが聖書を解釈するにあたって、どのような方法をとっていたのか、また、それが当時の文脈の中でどのような特徴をもっていたのかを、ロックが参照していた注釈

書、抜き書きしたメモ（草稿） 同時代人との書簡のやり取りの分析から把握し、新たな方法に依拠したロック特有の合理的な聖書解釈が、ロック自身の宗教思想や宗教的言説にどのような影響を与えたのか、ロックの宗教的著作（『キリスト教の合理性』や『パウロ書簡注解』等）を、当時の歴史的な文脈（政治的・宗教的な論争）の中で分析することから明らかにすることを当初の目的としていた。また、そうした思想的・言説的变化が当時の社会状況にどのような影響・インパクトを与えたのかについても検討を予定していた。ただし、研究を遂行する中で、まずはロック自身の聖書解釈の特徴をより詳細に把握する必要が出てきたため、その点を中心に研究を進めることとなった。

3. 研究の方法

本研究では、17世紀後半から18世紀にかけての思想的展開について、聖書解釈の方法の変化が、当時の政治的・宗教的な論争の中で、宗教思想や宗教的言説に与えた影響を軸に、一次資料の分析を中心に研究を進めた。具体的には、以下のテキストの分析を重点的に行った。

- ・ John Locke, *The Reasonableness of Christianity*, 1695.
- ・ John Locke, *A Vindication of the Reasonableness of Christianity*, 1695.
- ・ John Locke, *A Second Vindication of the Reasonableness of Christianity*, 1697.
- ・ John Locke, *A Paraphrase and Notes on the Epistles of St. Paul to the Galatians, 1 and 2 Corinthians, Romans, Ephesians*, 1705-1707.
- ・ John Edwards, *Some Thoughts Concerning the Several Causes and Occasions of Atheism*, 1695.
- ・ John Edwards, *Socinianism Unmasked*, 1696.

一次資料の分析を行うにあたり、分析精度を高めるために、分析対象の資料が書かれた時代状況の把握を精力的に行った。また、自身の解釈の妥当性を検証するために、所属学会やジョン・ロック研究会等で研究報告を行うとともに、隣接分野の研究者と積極的な意見交換を行った。

4. 研究成果

(1) 2019年度

研究初年度は、ロックの『キリスト教の合理性』（1695年）（以下『合理性』）を二つの観点から再検討した。第一に、同著作それ自体の再検討である。これまでの自身の研究では、ロックの救済論における「内面」と「外面」の一致（＝信仰にもとづく行為の実践）の重要性を強調してきた。これに付け加えて、イエスが自身の神性（＝「イエスが救い主であること」）を示す仕方に注目し、以下の点をロックが強調していることを他の資料も援用しながら示した。それは、一般大衆であっても、理性的被造物である限り、イエスの行いを通じて、救済の教義を理解することができるという点である。

第二に、国教会聖職者であり厳格なカルヴァン主義者でもあったジョン・エドワーズによる批判の文脈での再検討である。具体的には、エドワーズの批判に対するロックの応答（『擁護』、『第二擁護』）について分析を行った。その結果、『合理性』で示した「行いの法」、「信仰の法」、「悔い改め」の関係性について、ロックが特に『第二擁護』でより詳細に議論を展開していること、また、その議論の図式がロック以前の国教会聖職者ヘンリ・ハモンドのそれ（「行いの契約／行いの法」、「恵みの契約／信仰の法」、「贖いの契約」の三つから、「贖いの契約」を除く、二つの契約の図式）と類似していることを示した。

(2) 2020年度

第二年度は、ロックの『キリスト教の合理性』を再検討するにあたり、論敵となった国教会聖職者ジョン・エドワーズの二つの著作、『無神論の幾つかの原因及び誘因に関する若干の考察』（1695年）と『暴かれたソツィーニ主義』（1696年）の分析を行った。その理由は、前年度、エドワーズの批判に対するロックの応答を分析する中で、エドワーズ自身がどのような議論を行っていたのかを正確に把握する必要があったからである。

エドワーズは、『考察』において、フランシス・ベーコンの議論（「無神論」）に依拠しながら、無神論の原因を列挙し、ソツィーニ派を無神論者と批判する。特にエドワーズは、ソツィーニ派が、彼らの理性を超えたもの（above their reason）（具体的には三位一体）を信仰の対象にしていないことを問題視する。他方、ロックの『合理性』に対しては、ロックが救済に必要な唯一の信仰箇条として、「イエスを救い主であると信じることを挙げる一方、それ以外の教説（原罪、イエスの神性、三位一体、キリストの贖罪）に言及していないことを批判する。ロックに対するこうした批判は、『暴かれたソツィーニ主義』でも繰り返されている。また、同著作でエドワーズは、唯一の信仰箇条を主張するロックの議論がソツィーニ派のヨハネス・クレリウスの議論と類似していることから、ロックをソツィーニ派と批判するだけでなく、その議論が無神論者に利用されるがゆえに、無神論の傾向があると批判する。こうしたエドワーズの批判に対して、ロックは、「議論の明確さ、強さ、公正さ」と「事実認識」、二つの点から、エドワーズに反論することとなる。

以上の分析から、エドワーズによるソツィーニ派とロックに対する批判の仕方には違いが

あることを明らかにした。前者では、「理性を超えた教義」の信仰の有無に焦点が絞られているのに対して、後者では、認識論的な批判というよりも、聖書の特定の箇所と言及しているか否かを中心に批判が展開されている。このエドワーズの批判様式に呼応するかたちで、ロックも、教義論争に踏み込むことなく（あるいは意図的に回避しながら）、エドワーズに反論したと考えられる。

(3) 2021年度

第三年度は、以下の二つの作業を行った。まず、ロックの『パウロ書簡注解』に関する先行研究を整理し、既存の研究において、同書がどのような視点から分析されてきたのかを確認した。そして、それを踏まえて、同書の分析を開始した。次に、前年度に行ったジョン・エドワーズの著作の分析を踏まえて、エドワーズの批判に対するロックの反論（『キリスト教の合理性の第一の擁護』（1695年）『キリスト教の合理性の第二の擁護』（1697年））を分析し、ロックの宗教的自由の射程について検討した。

一般的に、ロックは、『寛容論』（1667年）において、初期の著作『世俗権力二論』（1660-2年）にみられる「保守的」立場を変えて、より自由主義的な立場を取るようになり、その立場は『寛容書簡』（1689年）に受け継がれたと言われている。他方で、管見の限り、『キリスト教の合理性』以降のロックの議論の中には、宗教的自由の拡大に対する警戒心を見て取ることができる。特に、名誉革命後の三位一体や義認をめぐる論争が過熱する中、ロックは、宗教的自由が熱狂へと変化し、それが社会の不安定化をもたらすことを危惧していたように思われる。そこで、宗教的自由の拡大を抑制するためにロックは聖書の合理的な解釈を提示したのではないかという観点から、ロックのエドワーズに対する反論をあらためて検討した。そして、エドワーズに反論する中で、ロックが『キリスト教の合理性』の議論を拡充し、神の意志への服従（＝聖書の教えの実践）それはまた社会秩序を乱さない限りでの宗教的自由でもある）をより強調していること、また、ロックの議論が主に（宗教的自由の拡大を主張する）理神論者に向けられていることを具体的に明らかにし、それをロックの「保守的」側面として示した。

(4) 2022年度

最終年度は、ロックの『パウロ書簡注解』（特に『コリント人への第一の手紙注解』）を、ロックの知識論における「知性の自主独立」を手がかりに分析した（「知性の自主独立」に関しては、下川潔、『ジョン・ロックの自由主義政治哲学』名古屋大学出版会、2000年、の議論を参考にした）。下川によれば、「ロックは、『人間知性論』や『知性の正しい導き方』で知性の自主独立を説いたが、自らの著作を著わす際にも、思考の独立性を確保するための工夫をしている」という（同上、13頁）。また、ロックの友人ジェイムズ・ティレルも、ロックが『人間知性論』を執筆する際に、「他の人々のいかなる考えも取り入れないようにするために」、「その問題に関するいかなる本も読むことを拒否した」という（E. S. de Beer (ed.), *The Correspondence of John Locke*, Volume 4, Oxford: Oxford University Press, 1979, p. 36）。このことは、『パウロ書簡注解』にも当てはまり、ロックは序文の中で、聖書の解説者や注解者の手助けによって使徒の意向（＝聖書における救済の真理）にたどり着くことはできないと述べている。そして、何にもよらず、自らの知性を働かせて、聖書における救済の道を探求することが重要であると主張する。

同著作におけるロックの議論の特徴として、「肉的な人」と「霊的な人」との区別が挙げられる。「霊的な人」とは、啓示への「同意」によって信仰を確立し、それによって、「神の知恵」（＝福音の教義）を獲得した人のことである。ただし、そのためには、自ら知性を働かせて、「誤った教えから真実な教えを、善き有用なものを悪しき虚しい意見から見分け、神の聖霊によって啓示された真理を理解」しなければならない。この真理に至る方法は、ロックの知識論における真理の探究の方法と重なるものである。他方、「肉的な人」は、「特定の党派の見解」に左右され、自立的な知性の働きが妨げられるために、真理に到達することができない。ロックの注解によれば、パウロ自身、このことを問題視し、「反対派の中傷や非難から自らを擁護」するために、党派性を排除する議論を行っていたと解釈できる。晩年のロックについては、しばしば、理性から啓示に立脚点をシフトしたと言われるが、同著作の分析を通じて、ロックが自身の知識論を援用して注解を行っていることを具体的に示した。

これまでの研究成果と合わせた本研究の意義として、特に以下の二点を挙げるができる。第一に、当時の歴史的な文脈の中でロックの宗教的著作を分析することにより、ロックの聖書解釈の特徴（知性の働きにもとづく合理的な解釈）をより明確に把握することができたことである。第二に、そうした聖書解釈を提示したロックの意図やその社会的意味合いを、教義論争が過熱することによる宗教的熱狂や社会不安に対するロックの批判的態度の表れとして解釈できることを示したことである。当初の研究計画では、その社会的影響についても検討する予定であったが、当該期間において実施することができなかつたため、今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Keisuke Takei
2. 発表標題 Locke's Concept of Religious Liberty: Focus on his Refutation of John Edwards
3. 学会等名 The 2021 John Locke Conference (June 9-11, 2021, Naples, Italy online conference) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 武井敬亮
2. 発表標題 ジョン・エドワーズの無神論批判 ロック『キリスト教の合理性』批判を念頭に
3. 学会等名 日本イギリス哲学会関西部会 第63回研究例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 武井敬亮
2. 発表標題 ジョン・ロックのエドワーズ批判と宗教的自由の射程について
3. 学会等名 日本ピューリタニズム学会 第14回研究大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Keisuke Takei	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Bloomsbury USA Academic	5. 総ページ数 256
3. 書名 Salvation and Reasonableness in Locke's Reasonableness of Christianity in Kiyoshi Shimokawa and Peter R. Anstey (eds.), Locke on Knowledge, Politics and Religion: New Interpretations from Japan, pp. 189-213.	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------